

石蓆梁山泊

～つわぶきの野で夢を叶える～

島根県立津和野高等学校

女子バレーボール部

島根県鹿足郡津和野町後田ハ 12-3

TEL (0856) 72-0106

FAX (0856) 72-0329



令和4年8月号 (VOL.77)

I 「津和野踊り」に参加しました！ ～風情ある伝統行事に夏を満喫～

夏真っ盛りの8月15日(日)、津和野町殿町通りにおいて津和野殿町盆踊り大会【津和野踊り】が開催されました。そして、この津和野踊りにバレーボール部全員で参加させていただきました。

この津和野踊りは島根県の無形文化財にも指定されています。念仏踊りの一種で、室町時代からの古い形を残し、津和野藩初代藩主・亀井茲矩公が因幡国(鳥取県)の鹿野城にいた頃、城攻めの一計として、踊り手を敵城下に潜入させ、見物に出た敵方の手薄に乗じて奇襲をかけ、戦勝したという伝承もあります。

このように、この踊りは知略で戦に勝った記念の踊りとして、お盆に踊られるようになりました。

そして、津和野町への伝来は、亀井茲矩公の息子・亀井政矩公が津和野藩主となった1617年だといわれています。それ以来、今も8月10日から8月14日まで津和野町内各地で踊られ、最終日の8月15日には、町の中央通りである殿町通りで盆踊り大会として踊られています。この400年以上続く、夏の風物詩である盆踊り大会に参加させていただき、強化合宿の最中でしたが、夏の夜を満喫することができました。さらに、強化合宿に参加いただいている県外チームの皆さんにも踊りの輪に加わっていただき、おおいに盛り上げていただきました。

津和野殿町盆踊り大会は2017年に400回目を迎え、その年は500名もの人たちが参加されました。しかし、ここ数年は台風や新型コロナウイルス感染症流行拡大の影響で開催が出来ず、今年も4年ぶりの開催となりました。コロナ禍ではありましたが250名もの参加があり、普段は静かな津和野町もおおいに賑わいました。女子バレーボール部といたしましては、今後もこのような地域行事への積極的な参加を増やしていきたいと考えています。

津和野踊り保存会の皆様、ご苦労様でした。今後ともご指導のほど、よろしく願いいたします。楽しい時間をありがとうございました。



昨年は・・・

残念ながら、「殿町盆踊り大会」は、一昨年続き、新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため中止になりました。しかし、この伝統の灯を消さないために津和野踊り保存会のみなさんの集会が行われるとお聞きし、女子バレーボール部2・3年生6名が特別に参加させていただきました。体育の授業では、正装して踊りませんが、今回は衣装も貸していただき、本格的に踊ることが出来ました。優雅な舞を本格的に楽しむ一夜となり、夏の厳しい練習の最中ではありますが、津和野の歴史に触れる素晴らしい機会となりました。(部通信・令和3年度9月号より)

津和野高校の授業でも・・・

この津和野踊りは、津和野高校の授業でも練習をしています。津和野町以外の地域から入学する生徒の皆さんが津和野町により親しみをもってもらえるように、また、津和野出身の生徒の皆さんが地元の伝統行事を守っていくために、毎年夏休み前に津和野踊り保存会の皆様のご協力をいただき、1年生から3年生まで、全校生徒が、4～5時間の練習会を行っています。しっかり練習するので、リズムがゆっくりで足さばきや手の使い方が非常に難しい独特な踊りですが2年生にもなれば、完璧に踊れるようになります。そして、その優雅な踊りは、体育祭の“全校津和野踊りコンテスト”で披露されます。



Ⅱ 令和4年度『鍛錬行事』について

こちらは津和野高校の伝統行事である『鍛錬行事』のお知らせです。

この『鍛錬行事』は、子どもたちの成長を願う大人たちの思いから作られた学校行事です(裏面参照)。3年前は、急な悪天候(落雷)のため歩行途中で中止となり、2年前はコロナ感染拡大により前日の遠足と宿泊を中止とし、コースも25kmのショートコースで実施。さらに昨年は、そのコースをフルコースに近づけるべく35.9kmのコース設定で出発するも悪天候により低体温症の心配があり、途中で中止としました。つまり、伝統行事でありながら、ここ3年間は、フルコースでの実施が出来ませんでした。バレー部も日程的に春高バレー県予選の直前ということで歩行はせず、運営スタッフとして参加してきました。

しかし、今年度は、昨年度より1ヶ月早く実施することになり、低体温症の心配はなく、さらに希望者(人数調整あり)はフルコースを歩行出来るようにし、徐々に47.7kmフルコースが復活しました。

※お詫び※

私ごとではありますが、7月下旬に体調不良により、多くの皆様にご迷惑をおかけいたしました。特に恒例の隠岐遠征を中止しなければならず、コーディネートいただいている鳥本様・富田様をはじめ、拠点としていた隠岐の島役場・布施支所の皆様、布施公民館の皆様、宿泊先のジオ・リゾートシンフォニーのスタッフの皆様、本当に申し訳ありませんでした。現在は、体調も完全に回復いたしました。今後も皆様にはご迷惑をおかけしますが、何卒、よろしく願いいたします。

“ツコウ”の今をお届けします！

様々な情報発信を心がけています。
ぜひホームページを訪れてみてください。
学校生活や寮生活、部活動に関するニュース満載！
<http://tsuwano.ed.jp/>



津和野高校公式
インスタグラム
始めました！



保護者ボランティアスタッフ大募集！

2022 津和野高等学校

鍛錬行事

長距離歩行により、心身の鍛錬と体力の向上を図る。
ものごとに果敢に挑戦し、励ましあい助け合いながら粘り強く取り組む姿勢を涵養する。

日時 令和4年10月8日(土) 振替休日・9月28日(木)

新型コロナウイルス感染症感染拡大のため、10月7日(金)の遠足・宿泊は中止とします。

コース ①コースA 松陰神社(山口県萩市)～津和野高等学校【47.7km】
7:10 津和野駅集合・出発 8:10 歩行開始

②コースB 正覚寺付近駐車場(山口県萩市)～津和野高等学校【35.9km】
8:30 津和野高校集合 9:30 歩行開始

※ゴール(津和野高等学校)到着予定時間 18:00



○コース希望(予備)調査 8月30日(火)～ ○コース希望最終調査 9月9日(金)

保護者ボランティアスタッフ募集

※詳細は後日、ご家庭へプリント配布いたします。



お問合せ先: 総務部(藤原) 0856-72-0106

tsuwano_high_school

I 鍛錬行事が企画された背景・理由について

平成21年度に始まる第1回鍛錬行事が企画、検討を経て実施に至った背景・理由はいくつかありますが、一度にすべてが揃って出てきたわけではなく、ひとつふたつと重なってゆくに連れて徐々に津和野萩間47.5kmを歩くという形になりました。

① 修学旅行がないという学校を魅力化する上でのハンデをどう解消するか。

平成10年代の後半、生徒募集に苦戦する津和野高校では、生徒にとって魅力的な津和野高校とはどのようなものかがいつも話題になっていました。総務部で学校行事を見直していたのもそのためです。当時、県外出身生徒といえは山口県出身者しかいなかった時代ですが、「修学旅行がない高校なんてこの辺では聞きませんよ。西京高も山口高も3泊4日の修学旅行を実施しています。津高にはそれだけの行事もなく生徒は集まらないでしょう。」という厳しい声が山口県のPTA役員から上がる中、総務部では海外修学旅行の実施について調査が始まりました。しかし、折悪しく2008年(平成20年)のリーマンショックで経済事情が急変する中、保護者に新たな負担を強いる海外修学旅行案は会議に諮ることさえ憚られる状況に陥り頓挫しました。それでも当時の総務部は、入学直後の徳地研修1回だけでなく宿泊を伴う行事を創りたい、と考えていたのです。

② 懐かしいロードレースの写真、楽しいことだけが思い出じゃない。

2008年(平成20年)の創立100周年記念事業の記念誌に、過去の卒業アルバムから写真を選んで100年の推移をみるという企画があります。「ロードレース」の写真が何枚も候補に上がりましたが、2008年当時すでにロードレースは廃止されていて、編集会議では「ロードレースって走るの辛いけど、いい思い出だね。こんな行事でもなければ10km、20km走るなどないよ。」ということでロードレースの写真が記念誌に採用されています。これが、後に「つらいけれど乗り越えることで成長する」ための行事として、近隣の高校では珍しく“尋常ではない”距離を歩く企画につながりました。新行事の『鍛錬行事』と命名されたのはそのような経緯によります。聴いただけで後ろ向きになりそうなネーミングであり、もう少し洒落た行事名でもいいような気もしますが、もうすっかり定着した感があります。

③ 歩くことなら自分だってできる。

タイムを競うロードレースの場合、他県ではレース中の突然死の事例もあり、当初から「走る」という選択肢はありませんでした。自分のペースで走っても歩いてもOK、という案も検討されましたが、行事全体の時間管理が難しいので採用されませんでした。結果として残ったのが、「歩く」ことで、たまたまコース距離が47.5kmで、マラソンに匹敵します。「歩く」とはいえ、これだけの距離を歩くとなると容易ではありませんが、「走る」よりはハードルが低そうですし、「自分でもできる」と思う生徒が多いであろうと予想されました。歴史上の哲学者のことを例に出すまでもなく、「歩く」ことはものごとをじっくり考えたり、意識を内面に向けて自分と向き合ったりするのに適しています。自分と向き合うことが必要な高校時代、津高生にはその機会と経験が少ないのではないかと感じられました。酷寒の2月、早朝の永明寺で全校生徒が坐禅を組んだ『寒稽古』の行事も理由は同じです。



④ なぜ萩なのか？

第1回目のコースは出発地と目的地こそ逆ですが、コースはほぼ現在と同じです。試しに歩いてみたところ、参加者によっては注意力や体力が限界に達することがあると察せられたため、コースの歩きやすさは無論、自動車の交通量、休憩地やトイレの有無などが条件として浮かび上がりました。偶然にもそれらの環境が整っていたのが津和野～萩間の県道、国道でした。「移動する先の目的地はどこでもよい」わけではなく、それなりの場所に設定する必要があります。広島県の廿日市市までの参勤交代路いわゆる「津和野街道」も津和野高校に相応しい大義があって検討されましたが、コースの途中で泊を要したり、山道を歩かざるを得なかったりして採用には至りませんでした。萩に落ち着いたのは自然であったと思われます。第1回目の頃、山口高校と萩高校の生徒会執行部有志が年度末の3月に萩～山口間の萩往還の道を歩いて交流をはかっている、という話を聞いて、両校の素晴らしい行事に触発されつつも、修学旅行に続いてここでも負けることは許されない、と総務部では企画に力が入りました。ところで、民俗学者の折口信夫の言葉に「景観は人を養う」というものがあるそうです。(直接、出典にあたっていないので正確ではありません。)折口氏の意図を取り違えているかもしれませんが、私たちは馴染んだ風景によって知らず知らずのうちにものの考え方や感じ方、内面の土台が形づくられるものです。津和野盆地に生まれ津和野盆地に育った者であれば、その内面性として津和野の外に出て新しい世界を切り開くことへの願望があると思います。一日中、山の稜線に囲まれて生活していれば、「あの山の向こうはどうなっているのだろう?」と感じるのは自然です。これも出典を確かめるに至っておりませんが、津和野生まれの画家、安野光雅先生が話されていたように記憶しています。企画段階の試行でのことですが、吉田松陰先生誕生地(萩市椎原の団子岩)のゴールにボロボロの状態でたどり着いたとき、眼下の景色を目にしたときのことです。「萩を出て世界を視ようとした松陰先生のもの考え方に、この誕生の地から一望できる萩の街と日本海の景観が影響していないはずはない。津高生が吉田松陰という人物を介して雄飛するきっかけをつかむとしたら、ここを置いて他にはない。萩の城下を見渡し、日本海に沈む勇壮な夕日を見たら、津高生の心にきっと何らかの種がまかれるはず。この地以外にコースの終点はない。」と確信したものです。できすぎた話に聞こえますが、吉田松陰誕生地がゴールになったことでこの行事の大義が固まり、行事の主旨を説明したPTA役員会では満場一致で賛同が得られました。

II 宿泊を伴うようになった背景について・・・(中略)

III 津高の鍛錬行事の特徴について

50km近い距離を歩く行事を行っている高校は、全国では珍しくなく、中には100km近い学校もあります。その中で、津高が特色としているのは、やはりPTAとの不即不離の連携体制、そして何といたっても萩との歴史的なかわりではないかと思えます。第1回のときは事前に津和野町の郷土史家に津和野と萩の関係を幕末を中心に講演していただいた上で実施しました。松陰神社の当時の宮司さんがこの行事にたいへん関心を示され、2回目からは学芸員の先生や時には宮司さんご本人から吉田松陰とその門下生について詳しくお話をいただくようになりました。とりわけ宮司さんのお計らいで、今にも隣の部屋から志士が出てきそうな気配の松下村塾の座敷に上げていただく機会を許されたのは極めて希で光栄なことです。屋敷は国指定の重要文化財ですから、囲いの外から中をのぞくことはできても、座敷に上がるなど普通はできません。津高の鍛錬行事は、吉田松陰誕生地から松陰先生ご本人が眺めたであろう同じ景観を追体験することで津高生に何かを感じ取ってもらいたいという思いで始まったものですが、萩から津和野へ向かって歩く現行のコースでは誕生地に立ち寄ることはなくなりました。その代わり、追体験の最たるものが、志士たちがまさにその場で学問した同じ場所に坐らせていただくことで高校生と年頃のさして変わらない当時の若者の志を追想できる貴重な経験となっています。

(注) この文章は津和野高校創立110周年記念誌に掲載された記事を一部改めたものです。